

第三部

人は何故書くのか

ご紹介にあずかりました宗内です。標題に従いましてお話して参りたいと存じますが、今は今、大変戸惑っています。と言いますのは、標題の「人は何故書くのか」まではいいのですが、副題と言いますか、「私の場合を切り口に」などという馬鹿な但し書きをつけてしまったところがとても気になるのです。

一体、私宗内敦とはどの何者、物書きとしては全く無名の、いわばどこの馬の骨とも分らない人間です。これが例えば、県内出身の林真理子とか、これから話の中に出て参ります瀬戸内寂聴とかいった著名な物書きなら、「私の場合」というのが大いに生きて、たくさんの人々の興味や関心呼び起こすところでしょうけれども、どこの馬の骨とも分からぬ宗内何某では、人様にとってなんの魅力もなく、ましてや、人集めの材料にはなりません。

実は私、すでにこれと同じ失敗をしています。先ほど私の著書『演歌つれづれ』をご紹介いただきましたが、これの副題が「自伝風エッセイ」となっております。出版時、私としたら、おこがましくも内容にはほどほど自信があり、これで十分行けると思ってもいましたが、また、お読みいただいた方々からは、世辞ぬきに、かなりのお褒めの言葉を頂きましたが、これが、マスコミなどほとんどの文芸機関から無視され、もちろん本県の『山梨日々新聞』からも無視され、そうした結果、出版後三年近く経ちましたが、これは出版社に聞いてみなければ分からないことではあります。まだ百部も売れてはいないのではないのでしょうか。ただ、日刊紙の『日本農業新聞』で、農民文学作家の南雲道雄氏が、書評欄の中では一番大

きなスペースのところまで書評をしてくださり、また、視覚障害者のためにいろいろな読み物を点字翻訳化してインターネット上に流している「ないぶネット」というところが、この『演歌つれづれ』に読者からの希望があったということで、これを点字化して、今、インターネット上に流しています。が、やはり、物書き世界での無名の人間の個人史など、にわかに興味を持たれようはずもなく、例えばネット書店の最大手のアマゾンでは、出版以来まだ数冊しか売れていません。これに比べ、やはりご紹介いただきました先生、出番です！」

どの世界でもそうですが、名前の知名度や普及度は大変重要であろうかと思えます。そのようなこと百も承知であったのに、この度「書く喜び、創る愉しさ」に関わって講演を依頼されたとき、つい「私の場合」を付け加えて承諾してしまいました。それは、けっして物書きの専門家ではない私には、そのようなテーマで考えたことがあまりなく、つまりは自信がなかったのだ、つい、お茶を濁すような気持ちで、「私の場合」なら、と応えてしまったのでした。大変申し訳ない仕儀でございます。

それにしても、このような私の話に、部屋一杯に皆様お集まり下さり、真に恐縮に存じます。「人は何故書くのか」、個人的な話に終始してはあまりに失礼、また面白くもないので、私も一応は心理学者の端くれ、多少冗長になるかもしれませんが、「私の場合」を切り口に、「人は何故書くのか」を心理学的にも考察してみようと思えます。